

足立町教育

足立学園中学校・高等学校 広報誌

No.52





学園創立への情熱

理事長

初鹿野 恵太郎

「質実剛健・有為敢闘」は当学園の教育方針であり、又、「自ら学び 心ゆたかに たくましく」は教育目標である。

昭和4年に創立者の堀内亮一先生が、千住地区に男子中等教育機関の設置をしたいという地域の熱い要望に応え、先頭に立ち再三、東京府知事に申し入れを行ったが、当時の府も財政的に厳しい状況下にあった為、地域の有力者の支援と、私財を投じることで学校設立に至りました。その後は学校も順調に推移するも、戦争や経済不況等により幾多の困難はあったが、建学精神を貫き、お陰様で創立92周年を迎えることができました。

卒業生も34000人を超え、皆各地で社会人として立派に活躍をしており、創設当時の「志」や伝統は現在迄、脈々と受け継がれ続いていることは、改めて創立者及び支援者の方々の強い想いに心より、感謝を申し上げたいと思います。

現在も学園と地域は深い絆で結ばれており、数々の活発な交流をしております。しかしながら令和2年に入り、約1年を通して、日本中、及び世界中が、新型コロナウイルスの流行から、日常生活が色々と制限されました。生徒も登校出来なくなり、オンライン授業に切り替わりました。学園の行事も

全て中止となり、一番危惧していることは、全ての生徒が特に3年生はこれまで多くの時間をかけて勉強は無論、一生懸命に各々練習や努力を重ね、沢山の汗をかき、目指していた舞台がなくなってしまった悔しさ、辛さ、無念さは、察するに余りあり心が痛みます。

しかしながら、皆のこれ迄の努力は決して無駄ではありません。むしろ“チャンス”であったと考えて下さい。色々な世の中の仕組みや、医療関係者への感謝、そして今まで常に支えてくれた先生、友人、保護者、家族に対する感謝の気持ちも忘れないで下さい。

本校はオンライン授業も他校に先駆けて実施しました。都内でもモデル校として、都の教育庁の方々も見学に来校される程でした。今後はデジタル化の時代に入り、大切だとは思いますが、学校は生徒と先生、友達がいる対面授業や体験授業に優るものは無いと思います。今年度は色々な制約の中で過ごしましたが、この経験を生かし、更に逞しく、思いやりや感謝の気持ちを持って、どんな環境になっても学園の教育目標を常に頭に置き、これからの中学校生活(人生)を歩んで行く事を願っております。



人間力を養う

校長

井上 実

近年、日本の国際競争力が著しく低下しています。令和2年6月に国際経営開発研究所から発表された世界競争力調査によると、日本は前年の30位から34位へと転落しています。1989年から同調査において、4年連続1位を占めていた頃の勢いは見る影もなく、近年では香港、中国、韓国、台湾の後塵を拝しています。

日本の教育においては、知識を詰め込み、それを正確に再現する能力が重視されてきました。より高度な知識を身につけ、再現する能力は当然、重要な能力です。しかしながら、社会において、今必要とされる能力とはどのような力なのでしょうか。

人間力という言葉を頻繁に目にすることになりました。かつて、京大の元総長の故平澤興先生が「知識ではなく、その人の体全体から滲み出る味わいでその人物がわかる。また、そういう人にならなければなりません。」と言われていました。体全体から滲み出る味わい。それこそが人間力のことなのではないでしょうか。

もっと具体的に考えると、人間力とは人間の総合的な力ということでしょう。知識、技能、教養、人間関係力、実行力、徳性といった諸々の要素が総合して練り上げられ、発酵して結晶するものなのです。中には金力、財力、地位などを人間力の重要な要素であるといふ人もいます。確かに現実的にはそれらも一つ

の要素には違いありません。しかし、それらを全て失ったとしても、なお輝きを失わない人格の力こそ人間力と言うべきではないでしょうか。

その人間力を養うには何が必要でしょうか。根本的になくてはならないのが「情」の一字であると思います。物事に出会い、人物に出会い、発憤し、感激し、自己の理想に向かって向上心を燃やしていく。そういうものを根本に持つていなければ人間力はついてきません。次に大切なのは「志」です。いかなる志を持っているのか。その内容が人間力の大手厚薄重軽を決めるのです。

そして、その実現に向けて一貫して全力を尽くすことです。人生全てをかけて挑む。経験をなめ尽くすと言っても良いでしょう。最後に大切な事は「素直な心」であると思います。松下幸之助氏は最晩年まで、「素直の十段になります」と言い続けていました。素直な心、柔軟な心は人間力向上に欠かせない一念であると思います。

質実剛健・有為敢闘とは正に、そのようなことではないでしょうか。本校の卒業生、在校生の全てが、日本の国際競争力の向上に寄与すべく、「人間力」を備えた人財となるように教育力を高めていきたいと願っています。

高3探究について



2030年には、総人口の3割が65歳以上のとなる一方で、生産年齢人口は総人口の6割に減少するという予測。日本の国際的な存在感が低下するという予測。

子供たちの65%は将来、今は存在していない職業に就くという予測。

今後10年～20年程度で、半数近くの仕事が自動化される可能性が高いという予測。

さまざまな予測が話題になる中で、果たして実際の未来はいかなるものになるのでしょうか。

この「予測不可能な未来」を生きる子どもたちが、自らの力で逞しく、幸せな人生を生き抜くことができるような教育を考え、本校では3年前より東京都で初となる「探究コース」を設置しました。

「探究コース」初年度は、校内の先輩から知見を学ぶ機会がなく、先行事例も存在しないことから、目標を設定することが難しかったように思います。

しかし、彼らは個人探究活動によって道を切り拓き、後輩たちに探究論文集という功績を遺してくれました。その論文集から垣間見えるものは、調査すること・意見を持つこと・発表すること・評価されることの経験を通じた、実社会で生きる力を獲得したことになります。探究の種は蒔かれたばかりで、芽が出て開花するまでの道のりは確認が難しいのですが、本校が100周年を迎えるころには全校的に探究活動が当たり前になっていると確信できます。それほど、生徒たちの取り組みは果敢なものであったと言えます。

また、探究論文を自らの進路と結びつけて受験に臨み、大学受験の武器として活用する生徒が出てくることは、昨今の総合型選抜や公募制推薦の拡充における現状から、今後も増えてくると予想されます。探究本来の意味合いと進路実現が高い次元で融合し、生徒にとって本当に価値ある探究活動となる礎を、今年度の高校3年生が示してくれた結果となりました。

探究コース1期生である現高校3年生が、「課題探究」という新しい領域において、道なき道を進み、2期生である現高校2年生がその道を敷設してくれています。新型コロナウイルスの影響で4月から活動に制限が出ましたが、今年度は高校2年生と高校1年生が短い時間の中で集中して活動し、敷設された道をさらに整備してくれようとしています。

課題探究

探究コース



高校3年生 3年間の探究授業のまとめ 論文 概要

現高校3年生の書いた論文の概要の一部を掲載しました



世界最大のペシミスト

—紫式部をもとめて—

佐々木壯真(2019年度足立学園高等学校 2年A組8番)



要旨

本研究は、紫式部の著作である「源氏物語」、「紫式部日記」を通して紫式部自身を考察する。彼女の複雑な精神構造を、「源氏物語」の登場人物の心情描写や、その役回り、また「紫式部日記」における宮中描写から見て取れる心情や、消息文的部分における人物批評を通して彼女を定義していく。また、「源氏物語」誕生の理由、どのような思いをもってその世界を築いたかについて、考察していく。

1.序論(目的・背景) ※一部抜粋

私がこの論題を研究した背景とは、大きく分けて2つの理由がある。まず1つに、私自身が平安時代のことを好きであるからである。もともと私の研究対象は、平安時代の文化、生活であり、現在のような紫式部個人に焦点を当てた研究ではなかった。(中略)私が、平安時代の文化、生活、特に恋愛についての考察をしようと考えた時に、源氏物語を参考にしたのが契機である。そこで初めて源氏物語の様子というものを知り、私は、非常に興味を持った。

さらに、橋本治氏の、「源氏供養上・下」を読んで紫式部自身に多大な興味を持ったからである。この私の研究にも橋本治氏の考え方や、意見が多分に含まれている。具体的に紫式部のどのような面を考察していくかについてだが、主に彼女の外面ではなく、内面について考察していく。

2.本論(方法、実験、結果) ※一部抜粋

紫式部は、「紫式部日記」の中において、20人弱の人間に對して批評を行っている。その批評の中でも、特に、いわゆる平安四代才女といわれる、赤染衛門、和泉式部、清少納言についての批評を見ていきたいと思う。

(中略)「丹波守の北の方をば、宮、殿などのわたりには、匡衡衛門とぞ言ひはべる。(中略)ややもせば、腰はなれぬばかり折れかかりたる歌を詠み出で、えも言はぬよしばみごとしても、われかしこに思ひたる人、憎くもいとほしくもおぼえはべるわざなり。」

この三人の中で、唯一評価されているのが、赤染衛門である。やはり、自分の身の丈に合った、謙虚さをわきまえた女性に対しては、宰相の君や、源式部などに対してと同様に、外見だけでなく、内面的なことを評価しているようだ。和泉式部と全く対照的な女性であったと紫式部は考えていたようである。(中略)

さて、紫式部はこのように様々な女房に対して批評しているため、性根が腐っている、冷酷な人間であるとみられがちである。また、様々な人間に對して、自分の中での評価を書き記すという行為は、深層心理的に、その相手のことを下に見ているということの表れでもあると思う。が、しかし、知北美智子氏が「紫式部は、痛烈に他人を批判しながら、自分の中

にあるそういう部分を戒めようとした。他人を鏡として、自分の姿を見ようとしたのだった。そういうことから、良妻賢母型の女性であったと言われる赤染衛門に関しては批評がやらげられたのだろう。」

と述べているように、自分の中にある和泉式部的な部分や、清少納言的な部分に対しての反面教師的な批評であるとらえるのが最も正しいだろう。和泉式部の恋愛の部分、清少納言の漢文の素養をひけらかす部分を、自分に対しての戒めとして、紫式部は書き記したのであろう。ただ、紫式部も人間であるのだから、和泉式部のように自由に恋愛をしたかったであろうし、清少納言のように漢文の素養をひけらかしたいという承認欲求があったはずだ。そのフラストレーションが爆発したのが源氏物語という作品なのではないだろうか。あのような稀代のプレイボーイの作品を和泉式部のことを批評する女性が書くとは、私は到底思えない。

また、紫式部が源氏物語を書き始めたのは、夫、藤原宣孝が逝去した後だとされている。色々な欲求が爆発して、源氏物語は生まれたのではないだろうか。そう考えると、紫式部が源氏物語を記した理由に説明がつくと思う。



宇宙移民計画は有益なのか

一人類はいつか地上を捨てる一

金井 麟太郎(2019年度足立学園高等学校 2年B組5番)

要旨

AI技術などで人々の暮らしは快適になっている。しかし、良いことに犠牲はつきものだ。快適になればなるほど、地球の化石燃料や天然資源は減り、森林は伐採され、地上は人工物で埋め尽くされていく。さらに、人口が増えていけば、家庭ごみや生活排水が増え、汚染されていく。この状態を続けていくのならば、いつか地球は「人間が住むにふさわしくない惑星」と称される日が来てしまう。そうなってしまった場合、人間は宇宙に逃げなくてはならない。

逃げるとしても、住む場所が必要だ。しかし、地球に似た惑星を見つけるなんて、大変な作業になることだろう。それならば、新しく造った方がいいのかもしれない。自分が考えたのはスペースコロニーを造り「宇宙移民計画」を実行するというものだ。しかし、こんな計画が本当に実行されるのか。されたとして、逆効果ではないのか。ほかの計画があるのではないかだろうか。そんなことを考え、今回の探究で、スペースコロニーを造り、宇宙移民計画を実行することは人類にとって有益なことなのかを明らかにしたい。

3.結論および考察

結論としては、宇宙移民計画は、有益にはなるものの、有益だとみんなに思われるまでにとてもない時間を要する。コロニーを造って、居住区を造って。それだけでいittaiどれほど人間に負担がかかるか。コストが高いか。そうやって考えると、シミズドリームの方が有益だと思う。

しかしそれは、今、この状況で考えたらの話である。シミズドリームは今打てる打開策、スペースコロニーは追いつめられる数歩手前で打つ奥の手だと最終的には落ち着いた。

4.今後の展望

正直、時間が足りなかった感じがする。違う形状のスペースコロニーも調べられなかった。コロニーはともかく、シミズドリーム以外の移民計画を調べることもできなかった。今後、比較ができたらなと思う。

そして、さらに追加で調べなくてはならないことは、コロニーなどの居住空間を造り終わった後のこと。誰がその場を仕切って暮らしていくのか。国境・宗教・貧富の差を、どう乗り越えていくのか。そう、政治関連である。政治となるとまた違う分野が絡んでくるから、また一から調べ出す必要がある。



キャッシュレス化への警鐘

—今の日本のキャッシュレス化は正しいのか—

宮崎 聰人(2019年度足立学園高等学校 2年B組15番)

要旨

現在日本ではキャッシュレス化が急速に進行しており、私たちの日常生活に大きな変革をもたらそうとしている。本論文では、そんな急速なキャッシュレス化に対して警鐘を鳴らす意味を込めて主にキャッシュレス化への不安要素を中心に記している。

2. 本論(方法、実験、結果)

この研究をするにあたって、一番大事なことは今を生きる人々の考え方をきちんと聞くことである。そこで私は、足立学園の中学校2年生から高校2年生のランダムに選出した、およそ15クラスの生徒を対象に任意のアンケートを実施し、480名の生徒が回答した。アンケートの主な項目は、「日常生活における決済においての不満度」「日本はキャッシュレスを進めていくべきか」「キャッシュレス化において想像できる

メリットとデメリット」などの計14個の質問である。これらの14個の質問的回答から、足立学園の生徒はキャッシュレス化に対してどのような考え方を持っているのかを調査し、そのデータを分析して、最終的に自分の結論に生かしていきたいと思う。

4. 今後の展望

今後は、個人商店のお店だけでなく、チェーン店などの大手のお店にもインタビューをしに行き、提供者側からたくさん意見を聞く。また、消費者側からも、より多くの人にアンケートに答えてもらうことによって世の中の意見を集計し、まとめることで自分の考察に生かしていきたいと思う。

6. おわりに

私が、なぜこの探究テーマにし探究活動を行ったかは、第一に当たり前のように、誰かに止められるようなこともなく、変化していく世の中に対して一度立ち止まって疑問視してみようと思ったからです。そこで、今の自分の生活を振り返ってみて、身近にある世の中の変化について考えてみたところ、ふと思いついたのがキャッシュレス化についてだったのです。もともとテレビやSNSなどで〇〇Payなどのワードを見たり聞いたりする回数が多くあり、世の中のキャッシュレス化への流れに対して少し興味がありました。

また加えて、自分自身が高校一年生の冬にカナダ留学に行き、日本よりもはるかにキャッシュレス化が進んでいるカナダのリアルな姿を見て、それが決め手となりました。しかし私は、日本がキャッシュレス化を進めるための探究活動ではなく、日本のキャッシュレス化をこれ以上進めないために警鐘を鳴らすべく探究活動を行いました。その理由として、前述にもあるように当たり前のように変化していく世の中を疑問視するという考えが背景にありました。

探究活動を進めていくにあたって、様々な調査や考察を行い、たくさんの事を学びました。今回の活動で学んだことはきっと自分自身の今後の人生に生きてくると思います。

終わりになりますが、自分の探究が何か世の中のためになれば幸いです。



高齢化社会で非高齢者が 高齢者に対しきれることは 一機械との関わり、人との関わりー

海老澤 周(2019年度足立学園高等学校 2年A組5番)



要旨

わたしには4人の祖父母がいて、いずれも自分の近所に住んでいるのでよく会う機会がある。祖父母が普段の生活でスマートフォンを使いこなせていない姿を見て、高齢者にとって生きにくい社会になっているのではないかと思い、高齢化社会で非高齢者が高齢者に対しきれることは何かを探求をはじめた。この探求は高齢者と機械との関わり、高齢者と人間関係という二つの角度から、非高齢者である私たちができることは何かを調べた。(後略)

2. 本論(方法、実験、結果) ※一部抜粋

どうして、高齢者にスマホが使いこなせない傾向があるのか。まず、操作そのものの難しさについて考えてみると、非高齢者は難なく操作できるが、高齢者は操作に難しさを感じる。likedocomo.netによると、その違いは、非高齢者がスマホを操作するときのタッチ操作と高齢者が操作するときの触り方の差にあるという。非高齢者、とくに10~20代の若い世代は、スマホ操作は「触れる感覚」で行う。しかしながら、高齢者の多くは、ATMや駅の券売機を利用するときのような「押す感覚」でスマホを利用する。そのため、スマホ操作で苦戦を強いられる。「押す感覚」でスマホを操作することで、2つの別の操作をしてしまうことがある。(中略)また、画面を指で触れることができ難しい場合は、タッチペンというものがある。そもそも難しい場合は利用を考えてみるのもいいと思う。

次に、操作の手順の難しさについて考えてみると、操作の手順は、覚えてしまえばそれで済むものである。しかし、高齢者はものの覚えが悪くなる傾向がある。そしてそのことが、高齢者がスマホを使いこなせない原因になっている。公益財団法人長寿科学振興財団の健康長寿ネットでは、老化現象のひとつとして、記憶力の低下を挙げている。一言に記憶力といつても、新しい事を覚える能力である記録力と、前にあったことをあとになって思い起こす能力である想起力などがある。今まで、なぜ老化現象として記憶力が低下するのか、この加齢性記憶障害の原因はよくわかつていなかった。近年になって、東京都医学総合研究所の堀内純二郎主席研究員、齊藤実参事研究員が、東京大学の山崎大介助教との共同研究で、加齢による記憶力低下の分子メカニズムを、ショウジョウバエを用いて明らかにした。(東京都福祉保健局の報道発表資料 2014年10月31日)しかしながら、いま現在、記憶力を劇的に回復させる特効薬は開発されておらず、多少の記憶力の低下は避けられないものになってしまっている。特にこの記録力と想起力の低下が複雑な操作の手順を覚えることを難しくしている。何度も教えて、なかなか覚えてくれない。前回教えたときにはできていたスマホ操作ができ

なくなっている。これは、老化による記録力、想起力の低下が原因である。このような老化現象は、一人ひとりの努力で避けられるものではなく、仕方ないことである。

では、スマホの使用は難しいので高齢者は使わなければいい。そう言いきれば、高齢者にとっても、楽なことだ。しかしながら、現代・近未来の社会を生き抜くにあたり、通信・情報機器の利用は不可欠になってくるだろう。スマホには、カメラ機能、動画サイト、クーポンやニュース記事など様々な用途がある。それにより、デジカメ業界は8年で7割縮小(BCNランキング)、「テレビ離れ」という言葉が生まれ、新聞社は今後十年間での倒産が懸念されている。(「新聞社崩壊」畠尾一知著)スマホによって他の業界が潰されていく社会のなかで、高齢者がスマホを使わないという方法は、不自由なく生きやすい社会にするための得策ではない。やはり、高齢者でもスマホを使いこなせるように、スマホ側が工夫をするべきである。



令和2年度大学入試合格状況と本校の進学指導



【表1】令和2年度合格実績大学合格数			
	現役生	既卒生	合計
一般受験	349	147	496
推薦・AO等	113	2	115
合計	462	149	611

1. 合格状況

国公立大学の合格者数は23名(現役17名)でした。北海道大学に現役1、東京大学1、東京工業大学に現役1、横浜国立大学に現役1、筑波大学に現役3、千葉大学に現役3など、昨年よりも10名増の合格者を出すことができました。

私立大学においては、定員厳格化から始まった難化が継続しており厳しい入試となりましたが、早稲田大学7(現役1)、慶應義塾大学3(現役1)、上智大学に現役3、東京理科大学10(現役8)と、難関大学で合計23名(現役13名)の合格者ができました。

今春の卒業生は289名で、例年に比べて少ない学年でしたが、良く健闘しました。合格数の内訳と主な大学の合格数は、表1・表2の通りです(合格数はすべて延べ数です)。

2. 本校の進学指導

本校では、生徒たちに「将来、志を達成し、キラキラと輝き、ワクワクしている大人になり、社会に貢献できる人材として活躍してほしい」という願いを持っています。それが達成できるには長い年月が必要となるでしょう。大学進学は一つの通過点です。しかしそれは大事な、重要な通過点であると捉えています。その先にある志を達成するために「早期に目標を持つ指導」「実力を養成できる指導」を2本柱としています。

まず「早期に目標を持つ指導」として、高1にキャリアデザイン講演会を実施し、10年先、50年先の自分を具体的にイメージする機会としています。社会人OBを招いての懇談会や、マイナビによる適学適職診断・講演会も行います。また文部科学省が後援している「夢ナビライブ」(10月・今年度はオンライン開催)にも全員で参加します。国内最大級の進学イベントで、300以上もある講義から自分が興味・関心を持つ学問分野のものを受講できます。「大学で学びたいことが見つかった」「将来のなりたい職業と大学での学びがつながった」等、生徒からも好評です。高2以降では、大学生OBによる講演会、国公立進学ガイダンス、各大学による校内説明会などを実施し、それぞれの希望進路に合った、より具体的な指導を行っています。さらに、各大学オープンキャンパス(オンライン開催含む)への参加を強く推奨し、体験を通じて生徒の進学意識を高め、主体的に自らの進路を決定できるよう促しています。これらの経験や学びをすべてポートフォリオへ蓄積し、振り返りを行うことで、生徒たちのより大きな成長を図ります。

「実力を養成する指導」では、各コースに応じた効率的なカリキュラムと教科担当が工夫を重ねた授業を基本とし、夏期進学講習や高3直前ゼミ、高3国公立2次試験対策講座など実践力をつける講座(すべて無料)を充実させています。特に、高2以降の講座は科目別・レベル別に設置され、生徒が自分の実力などに応じて自由に選択することができるようになっています。

大学入試制度の変更が大きな話題となっていますが、本校の進学指導はこの変化に十分対応できるものと自負しています。今後とも「主体的に学ぶ生徒の育成」に重きをおいた指導をさらに続けてまいります。

3. 指定校推薦枠

指定校推薦枠(昨年度分)は、表3のように慶應義塾大学、青山学院大学、上智大学、東京理科大学、中央大学、明治大学など約140大学350名分の枠があります。

【表2】主な国公立・私立大学合格数

北海道大学	1	青山学院大学	8
北海道教育大学	1	学習院大学	9
茨城大学	5	慶應義塾大学	3
筑波大学	3	上智大学	3
埼玉大学	2	中央大学	10
千葉大学	4	東京理科大学	10
東京大学	1	法政大学	17
東京工業大学	1	明治大学	25
電気通信大学	1	立教大学	7
横浜国立大学	1	早稲田大学	7

【表3】主な指定校推薦枠

大 学	学 部
青山学院大学	法
学習院大学	法・文・国際社会科・理
関西学院大学	法・理工・生命環境
慶應義塾大学	理工
上智大学	理工
中央大学	総合政策・商・理工
東京理科大学	理工・理・基礎工・経営
明治大学	経営・理工

足立学園の海外研修は、短期と長期を含め、5つのプログラムがあります。

目的に合わせて選べる希望制のプログラムは全部で5つ

オーストラリアスタディーツアー(中1~)

短期の海外研修としては、オーストラリア・クイーンズランド州スタディーツアー(12日間・8月)と、イギリスのパブリックスクールの1校であるラグビースクールにて行われる語学研修(15日間・7月~8月)があります。スタディーツアーは、ホームステイ型で、STEAM教育やグローバルリーダーシッププログラム等、多彩な内容です。一方イギリスの語学研修では、英語のスキルアップが一番の目的で、寮生活です。午前中に授業があり、午後と夕方は、アクティビティとしてスポーツや芸術、運動会などが行われます。世界中から多くの生徒が参加しており、国籍を超えたグローバルな交流が可能です。



オーストラリアスタディーツアーの様子 (写真は2019年度のもの)

マレーシアへの修学旅行(高校2年次 希望者)

※北海道、沖縄との選択

異文化交流と国際的視野の拡大を目的とします。首都のクアラルンプールを中心に訪れ、企業や学校を訪問し、現地の人々との交流をします。

また、コース別に体験学習が用意され、マレーシアの自然・文化に触れます。

海外ターム留学(高1)

高校1年の1月から3月にかけて、約3か月のターム留学があります。滞在先はオーストラリアで、ホームステイをします。出発までに英検準2級を取得していれば、ESLを経ずにすぐに現地校授業に参加することができます。英語検定3級を取得していれば、現地の中学生相当の授業に参加いたします。

プログラム

オックスフォード大学(16歳~)

(ハートフォードカレッジ)

日本の高校では唯一のプログラムです。

そして本校留学プログラムの集大成が、オックスフォード大学短期留学プログラムです。こちらはハートフォードカレッジにて行われる14日間の探究学習・協働学習プログラムで、最終日には課題研究発表を英語で行います。オックスフォード大学の学生スタッフがサポーターとなり、学習の援助をします。こちらのプログラムを14日間という長い日程で実施している高校は、本校が初めてです。出発時までに16歳以上の生徒が対象で9月に実施されます。

TOKYO GLOBAL GATEWAY の1日プログラム

海外研修に興味を持つきっかけとして、中学1年生全員が3月にTOKYO GLOBAL GATEWAYの1日プログラムに参加します。こちらは「東京都英語村」と呼ばれる施設で、英語を使って様々な課題をクリアしていく施設です。こちらの行事をきっかけに、英語が伝わる嬉しさを実感し、国際交流に興味を持ってもらえばと思っております。



このコロナ禍で感じたこと

2020年度は世界的な新型コロナウイルス感染拡大の影響で、どのプログラムも予定通りの実施ができませんでした。

その代わり、Microsoft Teamsの会議機能を利用し、スタディーツアーでお世話になっておりますMabel Park State High Schoolとオンラインでつなぎ、授業交流をいたしました。現地校の日本語クラスと日本語と英語を使って日常生活について質問し合ったり、写真などを共有しながら学校紹介をしたりと、活発な交流活動を行いました。

特に、2019年度にスタディーツアーに参加した生徒は、その時のバディ(スタディーツアーにてサポートをしてくれる現地校生徒)とオンライン上で再会できることに、喜びを表す瞬間もありました。

コロナ禍で、実際に直接会えることがいかに貴重なのか、また、このようにオンラインでも国際交流が可能であるということを実感した2020年がありました。



イギリス語学研修 ラグビー校寄宿生活

ラグビー校に着いてまず驚かされるのは、伝統ある校舎と、リスが走り回っている天然芝の校庭(広さはラグビー場2面分以上!)です。でも彼らがそれよりももっと戸惑うのは、日本とは違う文化やコミュニケーションでした。まずは歓迎ダンスパーティーで各国の留学生と顔を合わせます。

とにかく元気な中国の子ども達、キラキラしていて華やかな香港の子ども達、大人っぽくてイケてるヨーロッパの子ども達、凛としていかにも優秀そうなインドの子ども達…なかなか輪に入れない、実直な本校の生徒たちはただただ呆然としていましたが、それでも勇気を出して輪の中に入り、少しづつ溶け込んでいきました。



授業では、最初のテストで10名前後の少人数クラスに分けられました。みんなバラバラのクラスに入り、いよいよ語学授業の始まりです。やはり難しいのは「聞き取る力」でした。まずは先生やクラスメイトの声に全集中し、積極的に授業に参加しました。

現地の先生方からは「足立の生徒の授業態度は世界一!」と太鼓判をいただきました。授業の前にはスマホを回収しますが、放課後にはスマホを通してクラスメイトと仲良くなりました。スマホに夢中なのは世界共通なのかもしれません。





楽しい思い出もたくさんできました。まずは何と言ってもExcursion(遠足)です。産業革命村や古城、ショッピングモールなどそれぞれ楽しみました。ハリーポッタースタジオでは、お気に入りの魔法の杖も手に入れました!午後のアクティビティでは、みんなでスポーツやゲームに参加しました。

ハカ(ニュージーランドの踊り、オールブラックスが試合前に踊ることで有名)の振りと一緒に考えて披露したのもよい思い出です。

そんな中で最も大変だったのが、Model United Nations(模擬国連会議)でした。まだディベートの経験もなかった生徒たちが、英語で国際会議をする!という高いハードルでしたが、大変よく努力し、成果を残すことができました。

設定されていた7か国のうち、本校生徒(中3生)が2か国の代表役として堂々と発表しました。そのうちの1人であるN君は帰国後、高校入学前に英検準1級に合格しています。

行程後半になると、リスニング力もどんどん向上し、スタッフの話もほとんどわかるようになりました。

できることも日に日に増えていきました。ビートルズのTシャツを着てリバプールの街を歩いたり、ピザ屋さんでチップを払ったり、ロゼッタストーン観光をしたり、ロンドンのパブで食事をしたり…。何事にも挑戦していく生徒たちのたくましさに、大きな成長を感じました。中国と香港の生徒たちと2回ほど交流会も行いました。女子もいたせいか(?)最初は恥ずかしがっていたところもありましたが、共通の話題を見つけ、どんどん交流を深めることができました。

そして、お別れのダンスパーティーでは、みんな輪の真ん中で楽しんでいました。初日のシャイな姿とは見違えるようです。短い期間でしたが、十分すぎる経験ができました。英語でのコミュニケーションの難しさと楽しさを知るには、現地での経験は何ものにも代えがたいと再確認しました。ある生徒が、研修先のオックスフォードで「高校を卒業したら、大学は海外かな…」と話していたのがとても印象的でした。彼らの未来は、果てしなく広がっています。



中学一年D組担任
近藤市郎先生

足立学園中学一年生、コロナ禍の中で。



今年度の中学1年生の学園生活は「入学式中止」からスタートしました。

まず始めたのが、電話連絡。入学試験の時に提出していただいた写真を見ながら、一人ひとりと「はじめまして」の挨拶をしました。自宅での過ごし方はもちろん、それぞれのネット環境やPC、スマートフォンの利用状況なども確認させていただき、オンライン授業への準備を進めていきました。

授業を始めるに際して「スタディサプリ」を最大限に活用しました。本校では、コロナ以前から全校生徒に「スタディサプリ」を導入しており、全教員が研修会にも参加しています。これにより、スムーズに家庭学習を始めることができたように思います。個人の学習状況がわかるだけでなく、一人ひとりにメッセージも送信できるので、よりきめ細やかに生徒とコミュニケーションをとることができました。学年スタッフや教科担当者はもちろん、校長先生と副校長先生にも参加していただき、新入生応援動画も作成しました。

5月連休明けから、いよいよオンライン授業が始まりました。まずは朝と帰りのホームルームから。これもまたコロナ以前より導入していた「Microsoft Teams」のおかげでスムーズにリモートスクールが開始できました。教員よりも生徒たちの方がすんなりとこの状況に慣れていったかもしれません。今になって思えば、ですが、オンライン授業の時の方が、生徒たちの顔がよく見えました。今の学校生活で、マスクを取った顔が見られるのは、短い昼食の時間だけです。

日々とオンライン授業が進む中、中学で初めて学ぶ英語の授業を盛り上げたいと考えていました。そんな時、新入生応援動画の自己紹介で自分が言ったことを思い出しました。

「趣味はお笑い！」

そこで思い切ってマッシュルームカットのカツラをかぶり、メイクもしてポジティブな芸人になりきってみました。中学1年の大切な英語の授業動画をひたすら作成、配信しました。実際、生徒達にどれほどよい効果があったか(ウケたか?)は未知数ですが、自分自身の動画編集技術はどんどん向上し、噂を聞きつけたOBからは「何やってんすか?(笑)」といった楽しい連絡をもらう嬉しいハプニングもありました。

コロナが収束しない現在(12/7)、中学1年生は毎日元気です。それは、学年スタッフの丁寧で温かい指導があってのことだと確信しています。私自身はそんなスタッフの足手まといにならないように、必死で追いかけている日々を送っています。



高校一年学年主任 久原清治先生

足立学園高校 一年生 暗さゆえの光



首相による緊急事態宣言発令は入学式を翌日に控えた4月7日のことでした。8日、私ども1学年教員団は落胆の中で生徒の皆さんに届ける教材の発送作業を進めました。入学式、オリエンテーションは全てオンラインでの実施となりました。

ところが生徒の皆さんには早くも15日にスタディサプリ登録が完了しました。入試でお預かりしたメールアドレスと電話番号が頼りでした。さらに4月20日に学年全クラスでオンラインホームルームを始められる態勢が整いました。こんなにも早く294名の生徒諸君が学校との共同作業を成し遂げられたのはひとえに足立学園で頑張りたいとの皆さんの気持ちによります。足立学園で高校生活を充実させたい、自分の「志」を叶えたいという皆さんの気持ちを強く感じました。こんなにもスピードィーに新入生と学校がつながったのは全国でトップだと思います。

分散登校は6月1日から。クラスの初顔合わせは6月15日。すべて手探りの中で学校生活再開に向けて石橋をたたいて渡るように一つ一つの段階を積み重ねてきました。

現在も皆さんの健康を第一に考えた感染症対策を行う中で不自由な学校生活が続いている。検温確認・マスク着用・食事のとり方、そして楽しみにしていた部活動の規制など思いがけない事ばかりです。それでも、1年生は毎日元気一杯、楽しそうに学校生活を積み重ねています。私ども教員はそんな皆さんの姿に元気づけられながら、朝の挨拶を交わせる日々を愛おしく大切に思っています。

コロナウイルスは人との距離を遠くしました。しかしそれゆえ、皆さんの友だちを求める心、足立学園で頑張ろうという「志」を強く感じることができました。

今年の高校1年生は「ピンチはチャンス」の言葉通り、これからも立ち現われてくるであろうどんな困難もみんなの力で乗り越えていける、と確信しています。



ICTを利用した学校生活Withコロナ



2015年「行くぜ！授業改革」という合言葉をもとに、ICT教育、反転授業、アクティブラーニングなど「先進的な教育」の取り組みを始めました。2020年には本校の今までの取り組みがMicrosoft社に認定され、中学校・高等学校としては日本初のMicrosoft Showcase Schoolに認定されました。また、2018年にマイクロソフト認定教育イノベーターというマイクロソフトに認定された教職員が2名いました。2020年には18名と日本で一番多い在籍数となりました。

授業改革で、HRや教科の連絡はTeamsに書かれ、配布していたプリントはデータで共有し、宿題は課題フォルダに提出し、小テストやアンケートはFormsで実施し、PBLやグループワークはOneNoteを使い、データはOneDriveに保存し、レポートはWord、データ分析はExcel、プレゼンテーションはPowerPointを活用し、部活でも過去の試合の動画を共有する…など、様々な場面でICTの活用が進んでいます。コロナ禍のオンラインHRやオンライン授業、動画授業の実践でさらにICTは進みました。生徒に寄り添った授業を教員が作り、教員と生徒全員の協力がありコロナ禍も、大きな問題もなく乗り越えました。すべて自宅で実施する事も可能です。本校で教育が止まる事はありません。

今までではICTを使い、教員や生徒、或いは授業をつないできました。これから重要なのは、外とのつながりです。教科書主体の学習から、インターネットを利用した限界のない学習へ。探究心や志があれば、無限に学習が進められます。

また、卒業したOBや社会人とつながれば、今の世の中を知ることができます。机上の空論ではなく、リアルな仕事や情勢を知り、今何が必要なのか、そして、そのためには自分は何をすべきなのか考えられます。海外とつながればグローバル的な視野が広がります。ただ英語を勉強するだけではありません。学校で教わるだけの授業は終わりです。これからはどれだけ外と繋がれるかが大切になってきます。より生徒の可能性を伸ばすためにも、ICTをさらに活用していきます。

Microsoft Showcase School認定校

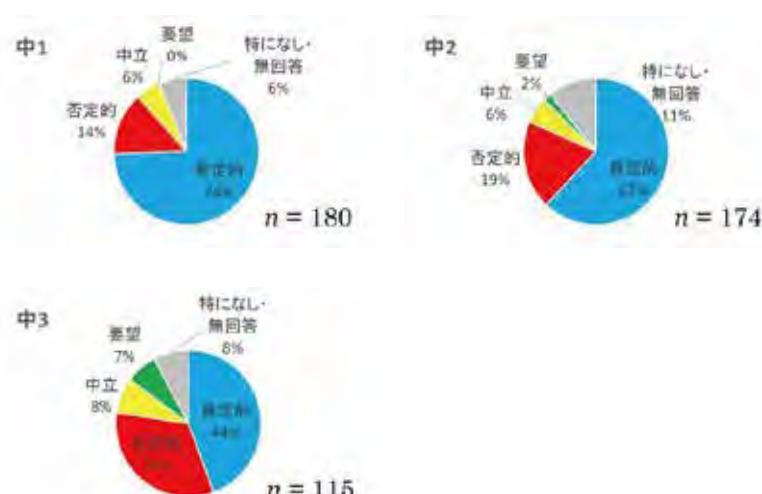
世界約200校、中・高では日本で唯一の認定校です。
ICTを有効活用できる人財になることを目指しています。



オンライン授業に関するアンケートの報告書

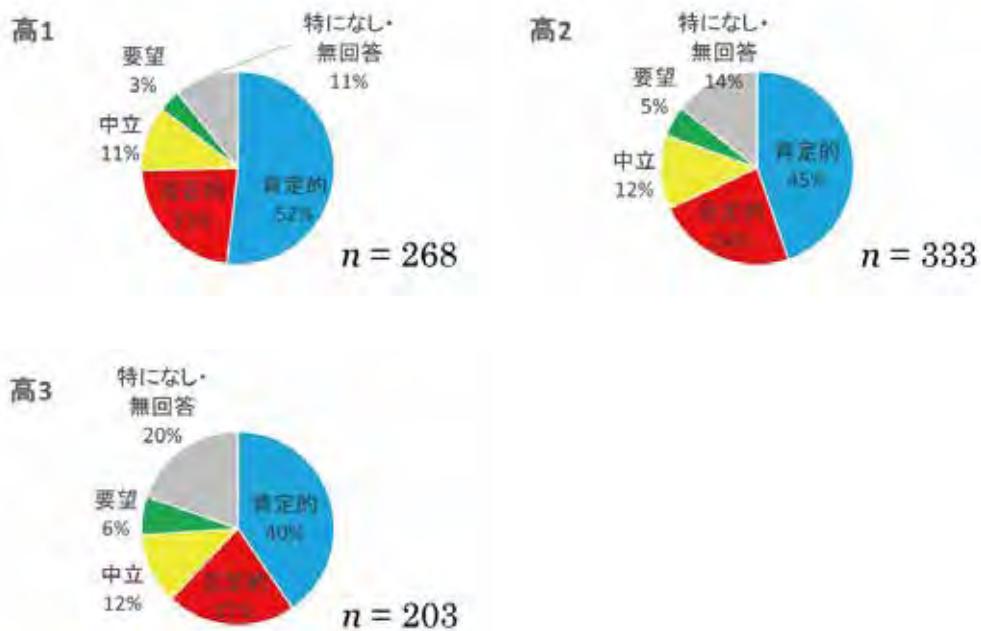


全校生徒を対象にオンライン授業に関する意識調査を以下の通り実施しましたので、その結果を報告します。

調査目的	本校初の試みであるオンライン授業に対する満足度および要望を調査し、オンライン授業の質を向上し今後の展開に生かすこと。																																				
調査期間	2020年 5月 16日 ~ 5月 20日																																				
実施対象	全校生徒（中学生 508名、高校生 906名 計 1,414名）																																				
調査方法	Formsによる回答																																				
問	オンライン授業を受けてどうですか？ 感想、良いところ、悪いところ、意見等何でも構いません。																																				
調査結果	<p>回答を 1.肯定的、2.否定的、3.中立的、4.意見、5.無回答・その他に分けて学年ごとに集計をした。</p>  <table border="1"> <caption>中1</caption> <thead> <tr> <th>回答</th> <th>割合</th> </tr> </thead> <tbody> <tr><td>肯定的</td><td>74%</td></tr> <tr><td>否定的</td><td>14%</td></tr> <tr><td>中立</td><td>6%</td></tr> <tr><td>要望</td><td>0%</td></tr> <tr><td>特になし・無回答</td><td>6%</td></tr> </tbody> </table> <table border="1"> <caption>中2</caption> <thead> <tr> <th>回答</th> <th>割合</th> </tr> </thead> <tbody> <tr><td>肯定的</td><td>67%</td></tr> <tr><td>否定的</td><td>19%</td></tr> <tr><td>中立</td><td>6%</td></tr> <tr><td>要望</td><td>2%</td></tr> <tr><td>特になし・無回答</td><td>11%</td></tr> </tbody> </table> <table border="1"> <caption>中3</caption> <thead> <tr> <th>回答</th> <th>割合</th> </tr> </thead> <tbody> <tr><td>肯定的</td><td>44%</td></tr> <tr><td>否定的</td><td>29%</td></tr> <tr><td>中立</td><td>8%</td></tr> <tr><td>要望</td><td>7%</td></tr> <tr><td>特になし・無回答</td><td>8%</td></tr> </tbody> </table>	回答	割合	肯定的	74%	否定的	14%	中立	6%	要望	0%	特になし・無回答	6%	回答	割合	肯定的	67%	否定的	19%	中立	6%	要望	2%	特になし・無回答	11%	回答	割合	肯定的	44%	否定的	29%	中立	8%	要望	7%	特になし・無回答	8%
回答	割合																																				
肯定的	74%																																				
否定的	14%																																				
中立	6%																																				
要望	0%																																				
特になし・無回答	6%																																				
回答	割合																																				
肯定的	67%																																				
否定的	19%																																				
中立	6%																																				
要望	2%																																				
特になし・無回答	11%																																				
回答	割合																																				
肯定的	44%																																				
否定的	29%																																				
中立	8%																																				
要望	7%																																				
特になし・無回答	8%																																				

オンライン授業に関するアンケートの

調査結果



・全学年を通じて肯定的意見の割合が最も高い。概ね高評価といえる。今後もオンライン授業を継続するのであれば、否定派の意見に鑑み、授業の質を向上して、より生徒が満足できるような授業を展開することが急務であるといえる。学年別に回答結果をみると、学年が高まるにつれ肯定的意見は減少する傾向にある。これより、授業内容が複雑になるにつれ対面式による詳細な指導を求めていことが伺える。

*以下は表1を参考にしてオンライン授業の利点・改善点を考察したものである。

・肯定的な意見の理由は主に「繰り返し再生できる」、「一時停止をしてマイペースで学習できる」といった動画独自の特性に起因している。多様性を有する生徒に対応するため、緊急時に限らず平時でもこれらの利点を活用した授業展開は一案であるといえるだろう。また、若干名であるが「登校する必要がない」といった感染予防の観点から意見を挙げた生徒の存在も見逃せない。

・否定的な意見の理由はネット環境に起因するものが多い。「画質・音質が悪い」、「バッファリングに時間がかかる」といった軽度の現象から「動画が観られない」といった重度のものが挙げられた。また、使用デバイスによっては「文字が読みにくい」、「メモリ使用量が大きい」といった意見も挙げられた。ネット環境と使用デバイスは共に家庭に依存する要素である。各家庭の経済状況は多様であるため、これらを早急に改善することは困難であるといえるだろう。改善するためにはアップローダーや動画形式そのものを変えるよりほかない。ネット環境に次いで多いのは「直接質問ができない」という意見である。これに関しては、チャットおよびビデオ通話を利用して改善することが可能である。

・要望としては課題に関する意見が多い。「課題を減らしてほしい」という意見がある一方で「課題を増やしてほしい」という意見が散見された(主に高校生)。また、課題の期限や提出方法が教科ごとに異なつており、生徒を混乱させているようである。システム統一を図ることで、生徒だけでなく教員の負担も減ると考えられるので、優先して改善したい内容である。

所感

表Ⅰ 学年別の代表的な意見

	肯定的	否定的	中立	要望
中1	<ul style="list-style-type: none"> ・繰り返し視聴できる ・動画を止めてノートをとることができる ・解説が分かりやすい ・落ち着いて集中できる 	<ul style="list-style-type: none"> ・回線が重い ・集中できない、メリハリがつかない ・直接のやりとり(友人・先生を含む)が欲しい 	<ul style="list-style-type: none"> ・分かりやすいが質問できない ・オンラインはよいが、顔が見えない ・オンライン授業には満足しているが、学校で学びたい 	
中2	<ul style="list-style-type: none"> ・何度も見返すことができる ・自分のペースで取り組むことができる ・分かりやすい ・移動もなく、オンラインでできることに感謝している 	<ul style="list-style-type: none"> ・集中できない ・教科ごとの課題・動画の差 ・回線のトラブルに左右される 	<ul style="list-style-type: none"> ・学校と変わらない ・集中できるが、動画が止まってしまう ・自分のスピードでできるが、授業の感じがなくなってしまう 	<ul style="list-style-type: none"> ・時間内に終わらない ・空き時間ができる
中3	<ul style="list-style-type: none"> ・何度も動画を視聴できる ・動画を止めてノートをとることができる ・登校時間がからない ・解説が分かりやすい ・チャットで質問をすることができるのは画期的 	<ul style="list-style-type: none"> ・直接質問できない ・分かりにくい ・もう少し詳しく説明してほしい ・頭に入ってこない ・時々止まってしまうのがストレス ・ちゃんと理解できているか不安 	<ul style="list-style-type: none"> ・便利だが慣れが必要 ・オンラインで勉強できるのはありがたいが、通信環境によって左右される ・何度も見れるが、そのせいで他の課題や提出時間に間に合わない ・オンライン自体はありがたいが、課題の提出を忘れたり、提出していくなくても何も言われない気がする 	<ul style="list-style-type: none"> ・待ち時間が長い ・教科による時間の差が激しい
高1	<ul style="list-style-type: none"> ・自分のペースで学習ができる ・一時停止ができる ・再生速度を変化できる ・動画が短めでちょうど良い ・登校のため電車に乗らなくて良い ・数学や物理は図やグラフが黒板より見やすい ・リラックスして授業を受けることができる 	<ul style="list-style-type: none"> ・通信環境によって動画が遅い、観られない ・設定が難しい、パスワードを忘れる ・ノートをどうとれば良いか分からぬ ・授業時間が短い・進度が遅い ・授業と帰りのHRの間があるので遅刻しやすい ・目が疲れる、肩が凝る 	<ul style="list-style-type: none"> ・繰り返し観ることができるが、通信環境によっては動画が再生できない ・授業としては成立しているが、家にいるため集中力が持続しない ・対面式に比べると理解度は劣るが、時間割通りに授業が実施されるため、生活リズムが整った 	<ul style="list-style-type: none"> ・出欠確認のFormsはクラスと氏名入力のみにしてほしい ・各教科によって課題の取り組み方が違うのでやり方を説明してほしい ・タブレットの制限を解除してほしい(ネットのフィルタリングのこと?) ・課題を増やしてほしい
高2	<ul style="list-style-type: none"> ・何度も見返すことができる ・動画を止めてノートをとることができ ・登校時間がからない ・解説が分かりやすい ・短時間なので集中できる ・チャットを使って質問をす ることができる 	<ul style="list-style-type: none"> ・一方通行の授業になてしまう ・質問をしにくい(チャットでのやり取りに抵抗がある) ・集中できない、メリハリがつかない ・画面が小さくて見にくい ・通信環境によっては画質・音質が悪い ・バッファに時間がかかる ・授業内容が定着しているかが分からない 	<ul style="list-style-type: none"> ・マイペースで学習できる一方、集中力が持続しない ・授業内容が簡潔で見やすい一方、単調に感じる ・課題内容が文字として残るので確認しやすい一方、掲示場所が統一されていないので確認に苦労する(課題の提出方法が統一されていないとの意見もあり) 	<ul style="list-style-type: none"> ・学校再開後はオンライン授業の復習をしてほしい ・課題はなるべく早く掲示してほしい ・課題を多くしてほしい。応用問題を出してほしい ・最後の授業から帰りのHRまで時間が空いている ・課題の掲示場所は各Teamの「課題」フォルダに統一してほしい
高3	<ul style="list-style-type: none"> ・何度も見返すことができる ・登校しなくて良い ・対面式授業より自由度が高い ・無駄な雑談がなく、中身がある ・オンライン授業はこれから続けてもいいと思った ・文字が見やすいので普段の授業よりやりやすい 	<ul style="list-style-type: none"> ・文字が読みにくいときがある ・雑談や細かい補足がないので面白くない ・課題が多い ・身についているか分からない ・字幕があると読みづらい(*字幕OFFは可能) ・メモリ使用量が大きい 	<ul style="list-style-type: none"> ・何度も見せる一方、電波が悪いときつい ・マイペースで復習できるがコミュニケーションをとりにくい ・国語の課題は問題ないが、英語の課題で英文をタイピングするのが大変 	<ul style="list-style-type: none"> ・リアルタイムで配信する授業よりも事前に撮影済の動画を配信してほしい ・タブレットの貸し出しをお願いしたい ・事前にプリントを配布してほしい ・課題提出が自主性になると良いと思う ・課題を送るのは平日にしてほしい ・課題を提出するTeamを統一してほしい

オンライン学園祭

新型コロナウイルスの感染が拡大し、学園祭の中止を余儀なくされました。学園祭実行委員では「1年間、学園祭のために頑張って活動をしてきた諸団体に対し、特に高校3年生を中心に発表の場を設定したい」という思いを出発点とし、オンライン学園祭の実現に向けて動き出しました。今回は各団体のパフォーマンス、発表、展示を動画にし、本校のホームページを通して配信する形で皆様にお届けすることになりました。

参加団体は8団体。発表当日は例年通りにステージを設営し、音響機材等も本番同様のものを準備しました。準備期間の短い中で、各団体できうるかぎり最高のパフォーマンスを披露してくれました。

動画の撮影は専門の方に依頼しましたが、生徒も教員も「撮影されること」に不慣れなため、立ち位置やタイミング、音響の調節に四苦八苦した場面もありました。

それでもプロの力を借りながら、各団体がそれぞれに魅力ある動画を撮影できたと思います。

学園祭というものは、パフォーマンスや発表や展示を通して、その場にいる人々がつながり、笑顔になるものだと思います。

学園祭の撮影当日は、参加団体の生徒のみの登校であり、「学園祭」の姿とは程遠いものでした。

しかしながら、現在、本校ホームページに各団体の動画が掲載されています。その動画を通して「学園祭」に参加していただき、動画を通して皆様とつながることができたら幸いです。

最後に、オンライン学園祭の運営にご尽力いただいた皆様に、この場を借りて感謝申し上げます。ありがとうございました。



卒業生OB

活躍する卒業生

足立学園を卒業後、大学進学あるいは自分の道を進んだOB。
その中でもユニークな活躍を見せる3名をご紹介いたします。



片山 士駿さん（フルート奏者）

2013年3月卒業

1995年千葉県生まれ。国立音楽大学ジャズ専修を首席で卒業、矢田部賞受賞。Manhattan School of Musicにて修士課程を修了。高校在学中より演奏活動を開始。第46回山野ビッグバンドジャズコンテストにて最優秀ソリスト賞を受賞。第20,21回太田市ジャズフェスティバルにてソリスト賞を受賞。National Flute Association Jazz Artist Competitionにて日本人初のWinner Playerに選出。これまで小曾根真氏、山下洋輔氏をはじめ様々なミュージャンと共に演。ニューヨークに住んでいたが、現在は新型コロナウイルスの影響で帰国し、国内で演奏活動を行っている。



<https://shunflute.wixsite.com/shunflute>



平田 圭さん（音楽起業家）

1999年3月卒業

足立学園在学中に現在の軽音楽部を設立。明治学院大学経済学部経済・経営学科に進み、2004年に卒業。ビジネス・ブレークスルー大学大学院（BBT大学院）経営管理専攻を2015年に卒業。IT関連会社の営業や、執行役員を経て、2020年に株式会社LITORYという会社を設立し、音楽起業家として音楽サービス事業を展開している。2月に「無観客ライブのオンラインフェス」を企画した。



<https://litory.jp/>



谷口 雄哉さん（映画・ドラマ監督）

2018年3月卒業

本校在学時はアメリカンフットボール部に所属。法政大学法学部法律学科に進学。在学中にテレビドラマ『相棒』の制作に携わる。その後多くの映画・ドラマに携わる。2020年5月に自らのオリジナル脚本による初監督作『ダブル・アンコール』同年8月に『ラハイナ・ヌーン』を公開し注目を集め。現在自身初の劇場公開長編映画を企画準備中。



<https://www.youtube.com/watch?app=desktop&v=>

部活動

部活動戦績・活動の記録

学校の代表として戦った成績一覧と活動記録の一部です。

今後の活躍にも期待しています!

【令和元年度～令和2年度の9月頃までの成績を主に掲載。】

アメリカンフットボール部

令和元年度

春季東京都大会 第3位
第45回関東高等学校アメリカンフットボール選手権大会 ベスト8
第51回全国高等学校アメリカンフットボール関東準優勝

中学アメリカンフットボール部

令和元年度

マリンボルトーナメント関東大会2回戦敗退
NFL Flag 春季大会プレーオフ出場
中学生選手権大会関東準優勝

剣道部

令和元年度

【高校】 東京都秋季剣道大会 団体ベスト16
独協大学高校親善剣道大会 団体ベスト8

【中学】

第5ブロック中学校秋季剣道大会 団体優勝
東京都中学校秋季剣道大会 ベスト8
足立区新人大会 団体優勝

硬式テニス部

令和元年度

足立区大会シングルス 3位
第43回東京都私立中学高等学校テニス選手権大会本戦出場

中学ゴルフ同好会・高校ゴルフ部

令和元年度

東京都中学校高等学校ゴルフ選手権大会 出場
関東高等学校ゴルフ選手権東京大会 出場

サッカー部

令和元年度

総体支部予選 ブロック決勝敗退
全国高校サッカー選手権大会 一次予選
ブロック決勝敗退
令和2年度
全国高校サッカー選手権大会一次予選 ブロック優勝
全国高校サッカー選手権大会二次予選 1回戦敗退

山岳部

令和元年度

蝶ヶ岳に登頂(標高2677m)

吹奏楽部(中・高)

令和元年度

吹奏楽コンクール東日本大会予選金賞
吹奏楽コンクール東日本大会最終代表選考会5位

中学サッカー部

令和元年度

総合体育大会第5支部予選 予選リーグ3位
新人大会 部支部ベスト16
令和2年度
夏季代替大会 2位トーナメント2位

柔道部

令和元年度

★高校柔道部
全日本カデ柔道体重別選手権大会55kg級 第3位
全日本カデ柔道体重別選手権大会60kg級 準優勝
関東大会出場
★中学柔道部
令和元年度全国中学校総合体育大会
男子60kg級 優勝
令和2年度東京都中学校新人柔道大会
団体戦 優勝

ソフトテニス部

令和元年度

春季大会東京都個人戦 ベスト128
国体予選東京都個人戦 トーナメント4回戦
秋季大会東京都個人戦 ベスト32
令和2年度
新進大会個人戦 東京都ベスト64
TokyoChallengeMatch個人戦東京都ベスト64

ソフトボール部

令和元年度

春季大会1回戦
夏季大会2回戦
新人大会 1回戦
令和2年度
新人大会 1回戦

卓球部

令和元年度

【高校】
関東予選 団体6位
インターハイ予選 団体4位 ダブルス5位
東京都新人大会 団体4位
シングルス3位 小林 竜也
関東新人大会(2部)団体優勝
全日本選手権(ジュニアの部)出場 小林 竜也
【中学】
足立区ジュニアスポーツ大会 シングルス 優勝
足立区春季大会 団体準優勝 ダブルス 優勝
足立区夏季大会 団体準優勝 シングルス 優勝
足立区秋季大会 団体優勝 シングルス 優勝
東京都新人大会 団体ベスト8

ハンドボール部

令和元年度

インターハイ予選 都ベスト32
令和元年度教育研修大会 準優勝

バスケットボール部

令和元年度

全国高校総体東京都予選 第5位

中学バスケットボール部

令和元年度

東京都私立大会 準優勝
シード権大会 優勝
足立区新人大会 準優勝
東京都新人大会 2回戦
足立区民大会 準優勝
墨東五区大会 足立区選抜選手
小阪 優成、本橋 和弥、関口 輝翔、宮嶋 隼人
令和2年度
シード権大会 優勝
足立区新人大会 優勝

バレー部

令和元年度

インターハイ予選 予選リーグ2勝 コート決勝敗退

硬式野球部

令和元年度

春季都大会 2回戦
選手権大会 4回戦
秋季大会 ブロック決勝
令和2年度
選手権大会(代替) 2回戦

中学野球部

令和元年度

春季大会1回戦
夏季大会2回戦
秋季大会2回戦

書道部

令和元年度

日本武道館奨励賞
成田山推薦日輪賞
令和2年度
日本武道館奨励賞
成田山推薦日輪賞

中学・高校将棋部

令和元年度

全国高等学校将棋選手権大会東京地区予選
(個人戦)
鈴木 世那 5位入賞
全国高等学校将棋選手権大会B級
小林 健太 準優勝

中学テニス部

令和元年度

東京都テニス選手権大会予選 第5ブロック大会
シングルスベスト32
第72回足立区民大会(ジュニア)ベスト16 4人
東京都新人テニス選手権大会予選 第5ブロック大会
シングルスベスト8

足立のブカツ～先生に聞いてみました～

インタビュー：中学校副校長 中学・高校卓球部顧問 高井 俊秀先生
中学・高校柔道部顧問 篠岡 慶昂先生

2020年はコロナウイルスの影響で多くの学校が休校になり、当然その影響で部活動でも多くの大会が中止になりました。限られた活動時間の中で生徒達がどのように活動しているのか、今年度は中学校副校長で卓球部顧問の高井先生と先日中学生が初の団体戦優勝を果たした柔道部の顧問篠岡先生にお話を伺いました。

《卓球部》

Q1. 現在の部員数を教えてください。(令和3年2月現在)

中学生が30名、高校生が20名です。

Q2. 感染防止のために留意していることを教えてください。

基本的な感染対策を徹底して行っています。卓球台の消毒を練習の始まる前と終わった後に必ず行い、部員たちには手洗いや手指の消毒も徹底して行うように指導しています。またプレー時以外は必ずマスクをし、練習中の声出しま今はしないようにしています。そして、もしもの場合に備えて少しでも体調が悪い者は練習に参加させないようにしています。

Q3. 顧問の先生が部活動を指導する中で心掛けていることを教えてください。

技術指導はもちろんですが、とにかく人としてのあり方、どう生きるかということを意識して指導にあたっています。挨拶から始まり、卓球場の整理、美化、荷物の管理といった基本的なことからきちんとできるように声掛けをしています。部員全員が「感謝・挑戦」の言葉を胸に、卓球ができることに感謝し常に上を目指して挑戦する。これが人としてのあり方、どう生きるかに通じると信じています。

Q4. 現在のコロナ禍の中で生徒達がどのような様子で活動しているか教えてください。

やはりいろいろな大会が中止になり、モチベーションが下がっていることは否めません。そのため、その中のモチベーションのアップや、目標をもたせることを意識させています。個々としては目標は様々ですが、チームとしての目標は団体でのインターハイ出場です。その目標を達成するために、各個人がチームのために何をしなければならないかを考え、活動しています。緊急事態宣言の影響で活動できない時にも、各自が毎日のメニューや課題を卓球ノートに記録し、TEAMSを利用して顧問が確認するようにしています。

そのような活動を通して、8月のインターハイ代替大会2020 Tokyo Thanks Matchでは東京都3位。

新人戦は東京都4位。関東大会2部で優勝。全国選抜大会へのシングルスでの出場が決まりました。

今後の大会などでも、生徒たちはまた頑張ってくれると思います。

《柔道部》

Q1. 現在の部員数を教えてください。(令和3年2月現在)

中学生が18名、高校生が23名です。

Q2. 感染防止のために留意していることを教えてください。

生徒の検温・健康チェックを毎日行い、道場に入る時は必ず手指のアルコール消毒を行っています。また、定期的に畳のアルコール消毒も行い、道場は窓を開け換気も行っています。柔道の稽古では、生徒同士が組み合うため生徒間での距離の確保は困難です。そのため、稽古中は常にマスクを着用させています。

Q3. 顧問の先生が部活動を指導する中で心掛けていることを教えてください。

日頃からの感染対策を心がけることは当然ですが、それでも限られた時間で生徒たちの競技力向上もしていかないといけません。現在は本当にモチベーションを保つことさえ困難な状況です。思ったような稽古ができず、マイナス面に意識が行きがちです。ですから、我々は「何のために柔道をしているのか、何を成し遂げたいのか」という目的、目標を生徒に考えさせ、意識を高く持って稽古に参加できるように助言しています。「自分自身と向き合い考える時間ができた」とプラスの考え方を持てるように指導しました。また限られた時間内で様々な制限がある中で「質の高い稽古」ができるよう稽古のメニューも工夫するようにしています。生徒と会ってコミュニケーションをとることが困難でしたが、TEAMSを活用し連絡をとりあうことができたので、それは非常にありがたかったです。

Q4. 現在のコロナ禍の中で生徒達がどのような様子で活動しているか教えてください。

数々の大会が中止となり、生徒は物凄く落ち込んでいると私は考えていましたが、そんなことはなく、前向きな姿勢で部活動に取り組んでいます。12月に行われた東京都新人大会では団体で初優勝を成し遂げたが、それはあくまでも通過点であり全国大会で優勝するという目標に向けてチームがまとまり始めているように感じます。同級生だけではなく、先輩や後輩にもライバルがいて、お互いが切磋琢磨し合い、しかし、厳しい稽古が終わると学年問わず仲が良く非常に人間関係も良好であると感じています。

どちらの部活もコロナ禍の中で思ったように活動できていない中、自分たちの目標やその競技をやっている意味を見失わずに練習に励んでいる様子が印象的でした。この2つの部活動以外にも目標を見失わずに頑張っている部や生徒がたくさん存在します。そのような生徒の頑張っている様子を今後も皆様に伝えられるようにしたいと思います。

2020

